日本文学全集

4

狭衣物語

堤中納言物語

とりかえばや物語

日本文学全集 4

狭衣物語
堤中納言物語
とりかえばや物語

河出書房新社

日本文学全集 4　狭衣物語他

© 1960

編集委員
青野季吉　荒　正人
川端康成　瀬沼茂樹
中島健蔵

装幀者
原　　弘

N D C

昭和35年10月10日初版印刷
昭和35年10月15日初版発行

定価　290円

訳者代表　中村真一郎
発行者　河出孝雄
印刷者　中内佐光
印　刷：暁印刷株式会社
製　本：岸田製本紙工業株式会社
本文用紙：王子製紙工業株式会社
同納入：株式会社大和屋洋紙店
クロース：日本クロス工業株式会社
同納入：株式会社小島洋紙店

発行所　東京都千代田区神田小川町三の八　株式会社　河出書房新社
電話東京(291)3721～7
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

目次

狭衣物語……一
堤中納言物語……二六九
とりかえばや物語……三四五
注釈……池田弥三郎……四三〇
解説……池田弥三郎……四九九

狭衣物語

中村真一郎訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

『狭衣物語』の系図

一条院
後一条院
姫宮
一品の宮（狭衣の妻）
嵯峨院
春宮（母は堀川大臣の娘）
斎院（後一条院の后となる）
入道の宮（二の宮）
斎宮（三の宮）
堀川大臣
嵯峨院の中宮
狭衣
若宮
式部卿の宮の子
飛鳥井の女の姫
先帝
式部卿の宮
源氏の宮
後式部卿の宮
坊門の上
宰相中将
狭衣の后
堀川大臣の上
大宮
太政大臣
一条院の后
洞院の上
左大臣
大納言

その一

時は留まらないものであるから、はなやかな春も、もう三月の二十日すぎになった。庭先の木立ちが一面に青々と茂って、薄暗くなっているなかに、池の島に咲いた藤が松の枝のあいだに垂れさがって、郭公の声を待っている。それに水ぎわの八重の山吹が、夕ばえのなかでにおっているのが、その花で有名な井手の里*の景色にも劣らないありさまである。主の狭衣の中将*は、ひとりでながめるのも惜しい気がして、侍童にそのひと枝を折らせると、邸内の源氏の宮*の方へ持って行った。宮は中納言とか中将とかいう女房たちを相手にして、手習いをしたり絵を描いたり、気楽そうに遊んでいるところだった。

「この花が夕日に照りはえているのが、いつよりもみごとに見えたのだ。皇太子も花盛りの時には必ず見せてほしいと言っていたが」

と、縁先へその花を置く。と、ふと身を起こしてこちらを見た宮の目付が、花よりも明るかった。狭衣はいつものように胸が騒いで来て、つくづくとその姿がながめられた。

宮は、

「匂うより春は暮れゆく山吹の……」

と口ずさみながら、山吹を取りあげてもてあそびはじめた。その手つきのしなやかさは、思わず抱き寄せたくなるほどだった。

「くちなし色に咲かなければならないこの花の宿命は悲しいものだね。口に出して言えないという花の、心のなかはどのように苦しいことだろう」

と、狭衣が言う。と、女房の中納言が、

「でも、言葉はこんなにたくさんついておりますもの」

と答えながら、枝についた葉をつまんでみせる。

狭衣は、

いかにせむ言はぬ色なる花なれば
心のうちを知る人ぞなき

(どうしたものだろう。口に言わないという色の花なのだから、その心のなかを人に知ってはもらえないのだ)

と、思いつづけられるのだが、実際に、相手の源氏の宮は狭衣の恋心を知らないでいたのだった。絶え間のない想いを抱いて、母屋の柱に寄りかかっている狭衣の姿

は、いかにもみやびやかだったが、こうしたどうにもならない思いに、これほどのりっぱな人物がこがれ苦しんでいるのは、見ているのもつらいほどである。

この秘密の恋はどうしても相手に知らせるわけにゆかないのだから、なんとかして手づるを求めて手紙を渡そうというような普通の恋の苦労とは違っていた。――というのは、狭衣と源氏の宮とは幼いころから隔てなく、一つの邸内で育てられて来たので、親たちはじめ、他人も帝や皇太子などでさえ、その二人を実の兄妹同様に思っていた、――そういう間柄だったのだ。それなのに、わが心とは言いながら、狭衣はどうにもならない想いにとりつかれ、その想いを相手にほのめかすこともできず、たとえ意中を通じてみたところで、宮からはかえって以ての外のいやな恋心だとうとまれるかもしれないし、父母も、どれほど狭衣を溺愛しているとしても、この恋を認めてはくれないだろう。また世間の人もこの想いを聞き知ったら、けしからんことだ、いまさら、二人の結婚などありうべきことではない、……と噂になることだろう。――とは思うものの、しかし狭衣の心はいよいよ恋しさに燃えて、このままではやがてどのような身の果てになるだろう、と自分でも心細かった。いったい、今にはじまったことではないが、あまり美貌の娘を、実の兄でない男といっしょに、仲良くさせて育てるのは考えものである。

…そのころ、堀川の大臣といって関白だった人物は、一条院や嵯峨帝と同じお后から生まれた兄弟の中の第二子だった。母后もやはり皇族の出であって、ただの大臣扱いをするのはおそれ多い身の上であったのが、どういう不幸な運命か、臣下の身分となった。そこで先帝の遺言によって、帝は政治の実権をこの大臣に任せることにした。それゆえ、臣下とはいうもののたいへんに盛大な生活を営んでいた。二条堀川に四町四方の大邸宅を造り、そこを三つに仕切って、三人の夫人を住まわせている――という豪華さだった。堀川二町にいる夫人は、血縁である故先帝の妹の、前の斎宮*だった。洞院には、今の太政大臣の娘がいた。一条院の后の妹で、また、皇太子の伯母にあたり、こちらは世間の評判では、なかなかはなやかで裕福そうだった。坊門には式部卿の宮の娘がいて、ここははじめは最も心細げな暮らしぶりであったが、たぐいまれな美貌の娘を生んだので、その娘が参内して、中宮となった。その中宮はそのうえ、第一皇子を生んだから、勢力がかえって他の夫人よりも盛んになり、将来も希望に輝いていた。この三人の夫人の中では、前斎宮(堀川の上)はもともと先帝から養女として*あずけられて世話をしたので、特に身分柄からしてもだいじ

な妻であったが、容貌も性格も優れていて、そのうえ、この世のものとも思われないほどの優れた男の子を生んだので、特に大臣は寵愛を加えていた。昔、皇子母神*は千人の子どものうちのひとりのために、心も狂わんばかりだったと言うくらいだから、このひとりきりの男子は、親の身としてはかけがえもないものに思われるのも当然だった。今はその子は十八歳になり、二位の中将だった。――すなわち、これがこの物語の冒頭に登場した主人公、狭衣の中将である。身分柄、普通に言っても、この年配では大納言にはなっているはずである。ところが、この人物の性格容貌が異様なまでに優れているので、地位までも満足に与えると、かえって運命に憎まれてはいけないという配慮からだったのだろう。中将でとめておいたのだった。それでもまだ母は目立ち過ぎはしまいかと心配していた。――が、帝にしてみれば甥の狭衣をただの殿上人の仲間に入れておくのは心苦しいわけだから、むりにでもこの地位につけているという内情らしい。

この世に光明を与えるために釈迦牟尼仏がわが子の姿をとって現われでたのではあるまいか――と、両親はありがたいような恐ろしいような思いで、雨風はもちろん、日の光や月の光にさえもあらわには当たらないようにと、少しも目を放さずに袖でかくしておこうとするありさまだった。当人の狭衣にしてみれば、生長につれて、かえってその愛情が気づまりに感じることも出て来た。狭衣が夜遊びをして帰って来ない夜などは、両親とも横にもならないで心配しながら朝になるのを待っているのだが、顔を見てしまえばしかることもできずに、ただ安心して笑ってしまう。そうした様子は見苦しいくらいだった。たとえ世間体の悪いことを狭衣がしでかしても、それを無理にとめるといやな気がするだろうかと思えば、やめなさいとも言いだせない。だから、ふとしたことで情けをかけるようになった女ができたら、どんなに身分の卑しい者でもいいから、引き取って妻にしてやろうと、両親は決めているのだが、どういうわけか当人は、わがままのきく身分にもかかわらず身をつつしんでいて、この世をかりそめの味けないものだと思いこんでもいるように、貴族の子弟にはありがちの、女から女へと交際を広めて行くというようなことはなく、あり来たりの女の噂などは相手にもしない、といった様子だった。だから、かえってこれでは堅苦しくておもしろくない、と陰口をきいている人たちもあった。もっとも女たちの方では、ふとしたはずみに一行ほどの手紙をもらっても夢中になり、行きずりにかけられたひと言にも心をうばわれるということにもなった。だからたまに一夜の情けを得た女などは、暁の別れの鳥の声に命も絶えるか

と思うばかりで、その一夜の思い出がかえって恋心をつのらせるといったふうになる。そうして思いこがれている女が、身分の高い方にも低い方にも何人かはいたはずである。それにつけてもかの宮への思いは、だれを恨むというわけにもいかず、ただ苦しさばかりが優るので、その思いをまぎらすよすがにもと、打ち捨てておけないような間柄の相手に対しては、不人情にならぬように、花や紅葉、霜や雪、雨風の荒いまぎれや、哀れさのまさる夕暮れ、暁などに、思いがけなくたずねて行ったりするようになるが、それがまた相手の恋をそそることになる。いったいにきまじめな方だが、それでも、通りすがりに少しよしありげな田舎家の垣のほとりに咲いている撫子のような少女などに、それとなく目もとまるということもあるだろうから、野遊びのついでに旅寝するというような相手もないわけではないだろう。いつだったか梵網経という経文の中で、「女人を見れば、功徳がなくなる」といった句があったのを思いだして、外を歩くのに、車の簾をおろしておくことにしたことがあったが、それでも簾の脇の広く開いているところまでもふさごうとは思いかけなかったようだったから、どこまで本気だったかはわからない。男というものは、身分の低いものでさえ、身のほど知らずの恋をはじめるくらいなのだから。……

狭衣の中将の光り輝くばかりの容貌については、さきほども述べたところだが、そのうえ、才能や学問の点でも、唐人ならば知らぬこと、わが国では今も昔も類がないというほどだった。筆跡も、昔の名高い人々の書いたものは千年たっても、そのみごとさに変わりはないとはいうものの、狭衣のそれと比べ合わすと、趣味は時代によっていくぶんかわるものであるから、狭衣の方がどうしても、近代的に優艶な趣があって優れて見える、という評判だった。また琴や笛のほうも、ひとたび演奏すれば空まで鳴りわたり、天地が揺れるような気がするくらいであったから、親たちもかえって心配して、特に練習はさせないように取りはからった。狭衣自身もそのつもりで人に聞かせたりはしないようにしていた。——そこで趣味のない堅苦しい性格だという噂もたったのだが、それでいてちょっと口をきいても、またふとした身のこなしにも、それを見聞きした相手に、思わず憂えを忘れて微笑させるような魅力があった。こう書いていると、かえって白々しくなるほどである。万事がそのように、他に例もないような人物だと世間でも言いはやしているので、父の堀川の大殿などは、かえって空恐ろしくなり、あるいは天稚御子の生まれ変わりではあるまいか、もしかすると今日あたりは天女たちが羽衣を翻して迎えにお

りて来はしまいか、と、心が安まる時もなかった。

源氏の宮の方は、故先帝の晩年に、中納言の御息所の御腹から生まれたのだが、ひじょうにかわいらしい子どもだったので、今ごろになって、このようなものが生まれてはかえって残して行くのが心残りだと、苦しく思われながら育てているうちに、この皇女が三歳になったころに、父の院も母の御息所もうちつづいて世を去ったので、叔母である堀川の上（先斎宮）がかわいそうに思って引きとって、実子の狭衣と同じように愛育して来たのだった。夫の大臣も心を合わせて実の娘よりもだいじにしてくれた。今は十四五歳になったが、その姿を見かける人は、たとえ心の荒々しい武士でも、思わず気もちがやわらぐというくらいだったから、中将の思いつめた気もちにも同情できないことはない。しばらくの間はそれでも少しは他に似た女もあるだろうと、それを心頼みにして、狭衣はあの伝説の隠蓑を持っているわけではないが、機会あるごとに、身分の高下を問わずに、立ち聞きし、垣間見して、熱心に捜してもみた。——が、とうていい、宮に似た女は求めることができないとわかると、いよいよ人知れず心のなかで思いこがれることが激しくなり、流す涙は音無しの滝ともなろうというありさまであった。——それでも自制して紛らわしている。しかし、その様子はどことなく憂鬱そうに見えるので、生長ととともにしだいにこういう陰気な性質になったのだろう、と、本心も知らぬままに両親も思いあきらめていた。

一方、洞院に住む夫人（太政大臣の娘）の方では、いまだに子どもが生まれないのが寂しいので、しかるべき人の娘でも養女にして育ててみたいものだと心がけていた。

源氏の宮の美貌は有名になっていたから、皇太子が思いをかけているという噂があった。狭衣もいずれは宮が東宮妃になってしまうだろうと恐れていた。帝も以前の先帝の遺言を忘れずに、大臣と親密につきあっていたが、いっこうに宮のことが話題にのぼらないのを心配して、早く参内させたらどうか、とある時、催促なさった。しかし、大臣の方では、もう少し成熟して容貌も整ってからにしましょうと言って、そのつもりに決めているようだった。

そのうちに四月も終わって、五月四日となった。夕方、宮中から退出する途中で、中将は菖蒲をもった卑しい男たちが、ひっきりなしに行ったり来たりしているのを見かけた。その足の上の方まで泥にまみれているのも気にしないで、たくさんの菖蒲を束ねてかついで歩いている姿は、引き抜いて来た泥の沼がさぞ深かったろうと想像させるし、そんなにたくさん持って歩くのも苦労な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

ことだろうと気になって、

浮き沈みねのみながるるあやめ草

かかるこひぢ*と人も知らぬに

（泥は沈んで根だけが流れている菖蒲なので、こんな泥にまみれているものだとは人は知らないだろう）

と、口ずさんだ。ただ人知れずひそかに声をたてて泣いている自分の恋心を、この卑しい男たちの苦労をみるにつけても思い合わされたからである。この菖蒲もりっぱな邸の軒に掛けてあるのを見る時は、風情ありげにばかり思われていたものだったが、こうして自分の車の先を、顔まで見えないくらいにたくさんかつがれて行くのを見れば、風情などと言うものではない。行きかう男たちは歩きにくそうにうろうろして、自分の従者の荒々しい声にどなられると、あわてて無理に身をこごませようとしている。

「あんなに苦しそうにしているのを、そうどなりつけるな」

と、注意すると、随身は、

「慣れているのですから、当人は別に苦しいとも思ってはいないのです」

と、平気で答える。自分の心の苦しさを思い合わせて見ていた中将は、その答えがいかにも無情な言いぐさに聞こえた。

大きな邸も小さな家も、明日の節句のしたくで軒ごとに菖蒲をさすのに忙がしそうに見える。狭衣はそのありさまを車のなかからのぞきながら通り過ぎて行くと、どんな小さな貧しそうな家でも、一筋ずつはやはり軒にさそうとしている。あんな苦しい暮らしをしていても、そんなことだけは人なみにしたいものなのだろうと、同情しながら、扇を笛のかわりにして鳴らしている狭衣の顔に夕日が当たって、光るように美しく見えた。それを軒なみの窓からのぞいて、みとれている女たちなどもあった。中将の車は身分柄、むやみと華美には仕立ててはないが、お供の随身などは若くてりっぱな男をそろえてあるのだ。

「ああ、せめてあのお供の人たちになりたいものね。いつもあのかたのおそばにいることができて、どんなにうれしいことでしょう」などと噂しながら見送っている女たちのひとりが、車の通り過ぎて行ったあとで、まだなごりのつきないままに、軒の菖蒲をひと筋引き抜くと、急いで文を書いて、見苦しくない下女に持たせてあとを追いかけさせた。下女は車について走っている随身を呼びとめると、手紙を渡して帰ろうとした。すると、

「どこから来た手紙かわからなくなると、主人に申し上げようもなくなるから、このまま車に乗って行け」

と言って、その随身につかまってしまった。

狭衣はその場で従者から渡された菖蒲の文を開いてみた。

知らぬまのあやめはそれと見えずとも
　　蓬が門を過ぎずもあらなむ

（人にも知られないような名のない沼にはえている菖蒲のような身分ですが、この菖蒲をさしてある貧しい家を素通りしていただきたくはございませんものを）

と、記してある。どこの浮気女だろうと笑いながら、その下女にきかせたが、返事をしない。そのうちに気のきく従者が近所から硯を借りて持って来たので、中将は懐紙を出して、それに片仮名でこう書いた。

「見も分かで過ぎにけるかなおしなべて
　　軒の菖蒲のひましなければ

（軒毎に菖蒲が並んでいるので、つい見分けもつかずに通りすぎてしまいました）

後ほど改めておたずねしましょう」

と言づけて

「あの小女の入って行く家を見とどけるように」

と命じると、やがて随身が帰って来て、

「窓が高く明け放してあって、女たちがおおぜいみえました」

と復命した。

だれだろう、知っている女かなとは思ったけれども、このような行きずりの戯れに、ことさらに取りあう気にもならないし、どうした場合でも、こんないたずら心の相手などはすべきではないと、日ごろから決めてもいたのだった。

翌日は端午の節句で、狭衣は方々に手紙を書く。さまざまの色や紙質のいい紙をたくさん、ひろげ並べて、墨もこまやかにすった。その筆跡のみごとさには、多少の趣味のある者なら、どうしても返事をしたためないでは気のすまないほどである。ところが記されている歌の方がそれほどはおもしろくないという評判なのは、聞いた人がまちがえて覚えていたのかもしれない（というのは実は物語の作者の謙遜であるが）。

左大将の娘は宜耀殿の女御といわれて、皇太子妃として世にはなやいでいたが、どうした物のまぎれにか、狭衣は浅い契りを結ぶことになった。もとより、思うようにも会われぬし、なみなみのくふうでは便りも上げることはできない。あまり長く会わないでいたので、この時、恋しさのあまりに次の歌をおくった。

恋ひわたる袂はいつもかわかぬに
　　今日はあやめのねさへながれて

（恋しさのあまりに流す涙は、いつも袂をぬらしているが、今日、菖蒲の根が引き抜かれて流れる日は、い

つよりも声に出して泣きたい思いです)

また、一条院の皇女との出会いもはかないものであったせいか、なみならぬ美しさだという記憶があったので、なんとかしてもっとゆっくり会って、しげしげと顔を見たいものだと気にかかっていたところから、その姫宮の侍女の少将の命婦にあてて、こまやかな消息をしたためた中に、

おもひつついはがき沼のあやめぐさ
水籠りながら朽ちはてねとや

(岩のそそりたった沼のなかの菖蒲は、人に採られないので、水につかったままで朽ちるそうです。私の思いが口にしないままでほろびて行くように)

こうした手紙は各所へ書かれたが、同じようなものだから、これでやめにしておこう。このように折り折りの文通などはするけれども、心のなかでは、いつまで生きているわけでもない、どうせこの世は仮の世だと、寂しく思いあきらめているようである。濃い丁子色(黒ずんだ赤黄色)の単衣に紅の袴をつけて、頬杖をついて、気もちよく茂った池の菖蒲をながめながら、

「音羽の山には……」

(音羽の山の音にだに人の知るべく我が恋ひめかも……)と口ずさんでいる狭衣の声は、えも言えない。

さて、さきほどの手紙の返事が、いずれもおもしろいものであったが、特に宣耀殿のものは筆跡も風情が深くて、

うきにのみ沈む水屑となり果てゝ
今日はあやめのねだになかれず

(泥のなかに沈んで腐ってしまう菖蒲のような自分は、今日も根抜きされることもありません。泣くにも声が立てられないのです)

と書いてある。向かい合っている時のような気もちがされて、優しい思いが胸にしみとおるので、中将は涙ぐんで来た。そこで、その夕方、あるいは会うべき機会に恵まれるかもしれないと、参内しようとしていると、そこへちょうど、帝からお召しがあったので、いよいよ出かけることになり、まず父の大臣の方へ挨拶に行った。大臣はまだ今日は会っていなかったので、いつよりもかわいく思われて、微笑しながら狭衣に見とれている。

中将は、

「宮中からお召しがあったので参内しますが、中宮の方にお言づてはありますか」

ときいた(中宮は坊門に住む夫人の娘であるから、中将にも姉妹にあたる人である)。すると大臣は、

「かげんが悪いように聞いたので行ってみようとしていたが、自分もからだの調子が悪くているので、いずれゆっくりと出かけるつもりでいる。暑い間は、しばらくでも

宮中から退って、家に帰って休めばいいと思うんだが、れいによってなかなか、お暇がでないらしくてね」などと言う。そこで挨拶をすませて立ち上がりながら、狭衣が、

「まだ夏も盛りにならないのに、実に暑さの激しい年ですね。どういうお召しなんだろう」

とひとりごとを言うのを聞きつけて、母は、

「気分が悪いのなら、むりに参内することはないでしょう。円扇であおがせて、休んでいなさい」

と心配そうに、ながめている。金銀で模様を描いた紅色の単衣に、直衣も紅の色の濃いのを着て、紫地で裏は紅の浮織の綾で作った指貫の袴をはいている姿腰つきが、袴の裾までたおやかで優美に着こなしている。着物の色合いなど別に常人とは違っているわけでもないのに、中将が着るとひじょうにひきたって見えるので、母は、

「どうしてこうそら恐ろしいほどまでに、美男子に生長したのだろう」

と、涙を目にいっぱいにして、熱心にその後ろ姿を見送っているのを、まわりの侍女たちもまことにもっともな親心だと感動しないではいられなかった。

宮中では、帝が別段に儀式などもなくつれづれに思っておいでのところに、雨雲さえ立ちこめて陰鬱な気配になって来たので、皇太子が気晴らしにもとやって来て、雑談などされていた。お前の広縁には、太政大臣の子どもの権中納言、左兵衛督、左大将の子どもの宰相中将などの若い貴族たちが、おおぜい集まっているなかに、狭衣だけが参内していないのは、このごろのさみだれの空に光がみえないような寂しい感じがするというので、お召しがあったのだった。帝が、

「今夜の宴会には、ここにいる者は全部、自分の一番得意な楽器を、腕のかぎり、ひとりずつ演奏したらどうだろう」

とおっしゃると、東宮も、

「それはおもしろいですね」

と賛成したので、種々の楽器が取りだされた。権中納言には琵琶、兵衛督には箏の琴、宰相中将は和琴、中務の宮の少将は笙の笛*、狭衣の中将には横笛が手渡された。当今の名演奏家たちである。

「さあ、今夜は、ひとりずつその楽器を思いきりみごとに独奏して聞かせてもらいたいものだ」

と、帝がおっしゃると、一同は、

「合奏ならば、怪しいところもごまかせましょうが、独奏とはこまったことになりましたな」

と、閉口した。中にも中将は、

「何よりも音楽は、稽古さえしたことがないので」

と申し上げた。が、帝は、

「それなら、今夜、ここでこれから習い始めということにすれば、いいではないか」
と、おっしゃる。狭衣は、
「どなたかに教えていただけば、たどたどしくはやれましょうが、皆さんが秘術をつくすなかにあって、私だけが幼稚な演奏をやれば物笑いとなりましょう」
と、楽器には手も触れなかった。
「そういう気もちだとは知らなかった。意外なこともあるものだ。日ごろから、父の大臣にも劣らぬくらい、おまえのことは愛してきたつもりだったが、これくらいのつまらないことでも、私の言うことがきけないと言うならば、心の底はわかった。もういい。何も言うまい」
と、帝は気むずかしい顔つきになられたので、狭衣も困ってしまって、恐るおそる横笛を手にした。
「それなら、他のかたの演奏のあいだにはさんでいただいて、形ばかりまねをしてみましょう。ひとりではとうてい、むりですから」
と、弱りはてたような様子のかわいさには、帝もごきげんを直さずにはいられなかった。
　他の人たちも、今夜はなかなか特別な集まりになったものだと用心して、いっこうにはじめようとしない。
「中将にとっては、音楽は四番目、五番目くらいの才能に過ぎないらしいように思えますが、その余技にもかなわないくらいの演奏を、あつかましくお聞かせするというのは、はずかしいことです。いっそ、皆に代わってもらって、中将ひとりに、この楽器をつぎつぎとやってもらいたいものです」
と、権中納言が申し上げると、
「横笛ひとつでも、あんなに強情をはったのだから、とても他人の代役は無理だろうよ」
と、帝は皆に演奏をはじめるように、催促された。そこで、人々はそれぞれに思いきってやりはじめた。細心の注意をはらって奏するのが、実にみごとだった。
　いよいよ中将の番になると、帝は、
「さあ、どうしたね。どうしてもいやかね」
と、何度もまじめなお顔で責められる。狭衣はひじょうに迷惑して、こうと知っていたら、参内するのではなかったと後悔したが、のがれようもないので、笛の扱いかたもわざと初心らしく無器用にしながら、普通は知られていない秘曲をひとつ吹き鳴らした。
　帝は評判には聞いていたが、これほど巧みだとは思いもかけなかったから、今まで、聞かそうとしなかったことを、繰り返し恨まれながらも、口をきわめておほめになった。その場で聞いていた人たちは残らず、この世のものとは思われない楽音に、涙さえでてくるほどだった。
　しかし惜しいところでやめてしまったので帝は、

「それきりやめてしまうことはあるものではない」
と、催促される。
「この曲だけ、父が遊び半分に教えてくれましたので。ほかの曲は何ひとつ知りません」
と、狭衣が申し上げると、
「ひどい嘘をじょうずにつくね。大臣の演奏とはまるで感じが違っている。しかし、それほどいやなら、もう頼まないがね」
と、帝はまた、おっしゃる。皇太后宮の皇女たちも、こちらにおいでになっているころだと思うと、その人たちにも皆、聞かれているだろうと、狭衣はいよいよ困ってしまった。
月ももうかくれて、庭の燈籠の火が昼のように明るい。その火影に照らされて、狭衣の姿はいよいよ美しい。柱にもたれて、いやいやながらに吹きはじめた笛の音が、空にまで響いてのぼって行くように思われた。帝をはじめ宮中の身分の低い召使にいたるまで、皆、感動して涙を流したほどである。さみだれの空が陰鬱に垂れさがっているおりから、その楽の音に乗って魔物でも出て来はしないかと思われるほどであるが、父の大臣がもしこの場にいたら、どれほど感動するであろうかと、帝は袖もしぼれるほどに涙を流された。
夜がふけてくると、笛の音はいよいよ雲のあいだに沁み入って行くような気がしたが、稲妻がたびたび光って、雲行きが怪しくなってきた。雷が鳴りはじめるのかと見ているうちに、すっかり晴れあがって、星の光が月のように明るく照らすようになると、この笛の音と調子をあわせて、いろいろな楽器の音が空から聞こえてきた。その空の音楽は実に霊妙だった。帝、東宮をはじめとして、どうしたことかとあきれ騒いでいると、中将自身も心細くなって来て、その不安の念を押し払おうとするように、音の限り吹きすましはじめた。

いなづまの光に行かむ天の原
はるかに渡せ雲のかけはし

(稲妻の光をたよりに天の原までのぼってゆこうから、はるかに雲を橋にかけてくれ)

という思いで、狭衣は一心に吹いているから、月の都の人たちも感動するにちがいないと思っているうちに、天の楽の音はしだいに近づいて来て、紫の雲がたなびき渡ると見ると、古代の髪型のみずらに結った美しい童子が、香をたきこめた装束を優雅に着て、雲の間から降りて来た。童子は陽炎で作ったかと思われる薄い衣を、中将に投げかけて、袖を引きはじめた。狭衣もうつつの心になって来て、この地上にとどまる気もちもなくなってゆく。この童子の神々しい様子にひかれるままに、笛を吹きふき誘われてゆく気配である。帝は胸騒ぎがなされ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo